

世界に出るということ

咲夢まりあ

ノーベル賞晩餐会の映像を見るたび、私はある種の惜しさを覚える。

受賞者の方々は、研究や言葉において実に誠実で、スピーチやインタビューからは深い知性と素晴らしい人間性が伝わってくる。

しかし、晩餐会という場面になると、その威厳や存在感が十分に伝わりきらないように感じ、少しだけ残念に思うのだ。

ドレスコードが、プロトコール上の正礼装である「ホワイトタイ」の場面で、燕尾服に身を包んだ日本人男性がどこか落ち着かず場に溶け込めていないように見えるからだ。

それは体型や服の仕立ての問題ではない。日本では、世界に出る人に対して装いに伴う立ち居振る舞い、そして隣に立つ人への配慮まで含めた「社交の準備」が、十分に共有されてこなかったのだ。国際的な場では装いは相手に対する敬意表現である。

日本の報道では、「受賞者は晩餐会でダンスを踊るか」について、必ず取り上げられるが、私の知る範囲では「踊っ

「踊らなかった（踊れなかつ

で世間の関心は終わってしまった

しかし、本当に問われるべ
の場の文化に対応する準備が
ことではないだろうか。
養として受け継がれてきた欧
まうのは、個人の習慣の問題
ろう。



た」という話は聞いたことがない。
た）」と結果だけが報じられ、そこ
う。

きなのは踊ったか否かではなく、そ
社会としてなされてきたか、という

マナーやダンス、エスコートが教
州と異なり、日本人がためらってし
ではなく、学ぶ機会の少なさゆえだ

おもてなしとして準備された場でダンスがあるならば、それは音楽に導かれて人々が自然に輪に加わるというコミュニケーションを楽しむためである。もちろん上手に踊る必要はなく、その場の文化に敬意をもって応答できるよう準備しておく姿勢が豊かな国際交流に繋がるのではないだろうか。

価値観の多様化や儀式が簡略化される傾向にあるとはいえ、フォーマルな場では、夫婦同伴が求められる場が多くある。スポーツ選手なども含め、日本人が世界で評価される機会も増える中、服装から振舞まで、自然に学んでおくべき環境が醸成されるべきである。

ときに夫人が夫の後を控えめに歩く姿を見ると、その慎ましさが好感を持たれる一方で、本来は男性がエスコートし、女性はエスコートを受けることに慣れ、もっと堂々とその場に立ってよいのではないかとも思う。

世界に出るということは、自分一人の成果を示すことではない。共に立つ人が不安も含め、安心して輝ける場を整えることも一つの教養ではないだろうか。